

Title	死の不安と死生観に関する日韓比較研究 : 宗教や宗教観との関連を中心として
Author(s)	金, 佰姫
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1997, 2, p. 24-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

死の不安と死生観に関する日韓比較研究

—宗教や宗教観との関連を中心として—

金 佰 姫

I. 序論

1. はじめに

現代、日本では死に対する関心が高まっている。死に関する研究も多くなってきた。日本では、死や死生観、人の生き方や死に方に関する著籍が多い。しかし、韓国ではまだこのような動きはなく、そのような書籍もめったにない。日本は韓国より、死を考える環境ができていたといえよう。

日本と韓国は同じ東洋の国でいろいろと影響を与え合ってきており、似ているところも多いが、違うところもたくさんあると思われる。その中で、死や死の不安、宗教に対する考え方においては、どのような相違点があるのかということに興味を持ったのである。

2. 日本人と韓国人の死生観

1) 日本人の死生観

死生観は、時代的、社会的、文化的状況によって大きく異なる。古くから日本では死を穢れたものとし、忌み嫌う傾向が強かった。このような考え方は、現代でも踏襲されている。例えば、葬式に行った後、塩をまいてお清めをするといった習慣などがそれである(平山,1991,p218)。死後の世界に対しても、日本人の死生観の特徴が現れている。日本では、死後の世界は比較的近い所にあると考えられていた(曾野ら,1984)。死者を自然と一体化する傾向が強かったようで、死者は身近におり、しかも生きていたと考えられていた。

生に未練や執着を持つのも日本人の死に対する態度の特徴であり、日本人は未来については宿命としてあきらめ、過去については供養というかたちで限りなく執着し、未練を残すと考えられる(平山,1991)。日本人の死生観を一言で言えば、自然のふところにかえる、先祖と一体化する、自然と一体化する、死後も現実の風土性の中で生き続ける、生き続けたい故郷の山のかなたに浄土がある、というものである(松岡,1992)。

2) 韓国人の死生観

今日の韓国人の思想は、巫俗信仰に基づく儒教や仏教、キリスト教の影響を多く受けていると考えられる。韓国人の死生観も同様にそれらの影響を受けているといえるだろう。韓国人の死生観を見ていくと日本人の死生観と似ているところが多いことがわかる。日本人に死を古くから否定する傾向があったのと同じく、韓国人にもシャーマニズムと儒教の大きな影響から、現世的なものに傾き、死は避けるべきもの、否定すべきものとして捉える傾向がある。韓国人の中にも日本人と同様に、死を忌み嫌い、死を恐れ、葬儀の後、塩をまく習慣が未だに残っている。

韓国人の死生観は日本人と似ている点が多い。それは同じ東洋の国で、歴史的にも影響

をしあったためであろう。しかし、韓国では韓国人が死についてどう考えてきたかについての文献は少ないため、韓国人の死生観を知ることは容易ではない。

3. 宗教と死

1) 宗教に対する日本人と韓国人の考え方

〈日本人の考え方〉

日本において、現代は第三次宗教ブームといわれている（室生,1986）。第一次宗教ブームは幕末の頃から明治維新の頃で、第二次宗教ブームは第二次世界大戦の日本敗戦直後である。現代における若者の宗教的関心と宗教行動の増大が指摘されている（高木・張,1989）。

日本には仏教、キリスト教、日本の神道や新興宗教などが併存している。日本人の信仰がこれらの複数の宗教に関係を持っていることを「重層信仰」とよび、日本の宗教と信仰の多重性と複雑性を表している（高木・張,1989）。

〈韓国人の考え方〉

韓国人の宗教的な思想の底には、シャーマニズムがある。その上に中国から入ってきた儒教が韓国人の生活の中に深く浸透し、後で入ってきた仏教やキリスト教もその影響を受けている（Choi,1996）。儒教は確固たる哲学的価値観として取り入れられたと考えられる。

韓国人は、何らかの宗教を信じている場合、その他の宗教を宗教として認めず、認めるものにしてもそれは自分の信じるものとは全く違うものとして考えたがる。宗教を持っていない者にとっては、宗教はやっかいなものと思われることさえある。しかし、自分の生の助けになる宗教的な教えは抱擁し、受け入れると考えられる。

2) 死への恐れや不安

宗教家のジョン・バンヤンは、著書『天路歷程』で臨終の状態を死の川渡りにたとえ、次のように述べている。「彼らと門との間には、川があるのが見えたが、渡る橋がなく、川はきわめて深かったので巡礼者はひどくうろたえた。しかし、彼らを連れだってきた人は言った。『あなたがたは、これを渡って行かねばなりません。さもなければ門に達することはできません。』と」。ここで描かれている深い川底や大波は、死に臨んだ人々の恐れや不安を象徴している（平山,1991）。

死について人は何を恐れているのだろうか。Templer (1993) は次のようなことが死の不安と関連するという。

- ①宗教心の高い人にはより死の不安が少ない傾向がある。
- ②年輩の人は若い人や中年の人より、多少死の不安が少ない傾向がある。
- ③死の不安は、家族構成員に影響される傾向がある。思春期の死の不安は同姓の親の死の不安と関連する可能性が高い。夫婦間の死の不安も相関がある。
- ④死の不安は、精神的健康と死に関する特定な経験と関連がある。

3) 宗教における死

宗教的次元における死は生物学的次元の死とは異なって説明される。宗教においては、死を肉体の消滅という現象に限定しないということが特徴だといえる。宗教では、肉体の

消滅で死が遂げられるのではなく、死を通じてむしろ宗教的な生に移行していくという解釈をする。

キリスト教では、すべての人々の死後の運命は、永遠な救援か永遠な審判のどちらかであるといっている。キリスト教の死に関する基本的な理解においては、古代イスラエル人の死生観を知ることが必要であろう。紀元前1800年から紀元前600年の間の彼らの思想には生を重要視し、死をよくないこととする素朴なリアリズムがあった。旧約時代の人々は、人が死んだとき、神様がその人に許した生命の時間が過ぎ、生命力が衰えて、彼の先祖に戻っていったのだと言っていた。また、旧約時代の人々の死に対する恐れは、死そのものより神との関係が断絶されるということから生じる恐れであった。

キリスト教の死や死後に関する思想に影響を及んだ要素として、A.D.1世紀以後の福音とプラトン哲学及び新プラトン思想との出会いがある。人間の靈魂は不滅であるという思想がキリスト教の中に入ってきたのである。しかし、キリスト教の核心は生死の根源者である神様の信仰ということにある。

仏教において、死はひとつの変化の過程である。死は生の延長線上で理解される。死は生命循環の一部に過ぎないという。しかし、仏教では死を説明するより死は避けられないということを強調する。死は無想の範疇にはいるので、死そのものは永遠の死ではないという。輪廻や解脱については、普通の先祖は輪廻を続けるが、完全な修行者は解脱の境地に至るといふ。

4. 本研究の目的

対象者の死の不安が宗教・宗教に対する考え方と関わりを持つのかどうか、また持つのであれば、どのような関わりを持つのかを調べる。宗教や宗教に対する考え方、宗教観以外に死の不安と相関を持つ要素を調べる。また、日本と韓国の間で、宗教や宗教観、死に対する考え方や死の不安、死の不安と相関を持つ要素、これらのことについて違いがあるだろうか、あるのであれば果たしてどのような違いであるかを明らかにする。

II. 方法

1. 調査対象

日本と韓国の4年制看護大学の1年生から4年生までの学生である。日本の有効回答は103名(41.5%)であり、韓国が94名(78.3%)であった。対象はすべて女性であり、平均年齢は日本21.11歳(SD=2.93)、韓国20.36歳(SD=1.87)である。

2. 調査方法

質問紙調査法を用いた。この質問紙は、大きくIからIVまでの4つの質問群で構成されている。質問の内容は、先行研究で使われた尺度や項目に、筆者が独自に作成した質問項目を加えたものである。

質問Iは、個人の情報・死別の経験・宗教・宗教態度・死や死体・死後の世界・死生観・信仰に関する質問を含んでいる。質問IIでは、宗教観尺度使われている。質問IIIでは死の不安尺度が使われ、質問IVでは死や死後の世界に関する自由記述をしてもらい対象者の死

の不安を調べた。

3. 手続き

日本では4年制看護大学の協力を得て、質問紙をその大学に配り、回収箱を設置してもらい、学生たちに配布された質問紙が回収され次第送ってもらった。韓国の方は、筆者が直接韓国の大学に赴き学生たちの都合にあわせ、各学年が集まったときに質問紙を配布し、その場で回収した。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 日韓の看護学生の宗教や宗教活動及び宗教観について

1) 宗教について

本調査では、日韓の看護学生がどのような宗教を持ち、どのような宗教活動をしているか、またどのような宗教観を持っているかを調べた。金兪（1987）の研究によると、学生に多く見られる宗教行動は「おみくじ、易、占い」、「祈願行為」、「お守り、おふだ」といった現実的行動と「墓参り」である。詫摩（1986）によれば、「超自然的な能力」を60%の青年が信じ、「心の支え、慰め」としての宗教を肯定的に捉えてはいるが、「信仰を持つ者」は10%程度であるという。

今回の調査において、日本の看護学生の場合は77名（74.8%）、韓国の場合は43名（45.7%）が宗教を持っていなかった。日本の場合、宗教なしと回答した人が圧倒的に多かった。日本人は宗教心が薄いといわれているが（柏木,1995）、宗教なしと回答した裏にはこのような薄い宗教心が作用したのではないかと考えられる。次に多かった回答はキリスト教で、日本15名（14.6%）、韓国41名（43.6%）が回答した。韓国の看護学生の場合、宗教なし群とキリスト教を信じる群の間に有意差がなく、キリスト教を信じる人が日本と比べて多かった。韓国には、キリスト教を信じる人が多いといわれているが、この結果からもそれを伺えるといえよう。

2) 宗教活動について

宗教活動に関する質問項目には次のようである。「1つの宗教団体に所属し、熱心に信仰している」、「宗教団体に所属しているが、あまり活動していない」、「既成の宗教は信仰していないが、自分自身の信仰をきちんと持っている」、「宗教活動はしていないが、宗教・信仰に関心がある」、「宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心もない」、「宗教に反対である」。

日本の場合、宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心もないという回答が37名（35.9%）で最も多かった。最も少なかったのは、1つの宗教団体に所属し、熱心に信仰しているという回答で3名（2.9%）であった。これらの結果からも日本人の薄い信仰心をうかがうことができよう。

韓国の場合、宗教活動はしていないが、宗教・信仰に関心があると回答した群が26名（27.7%）で最も多く、次に宗教団体に所属はしているが、あまり活動していないと回答した群が24名（25.5%）で多かった。この結果から韓国の看護学生は日本の学生より、宗教

や信仰を持っていなくてもそれらに関心を持っていることがわかる。また、日韓ともに宗教に反対すると回答した群が非常に少ないことから、宗教に関心がない人でもそれほど宗教に対し否定的ではないことが考えられる。

3) 宗教観について

宗教観を測る尺度として高木ら(1987)による宗教観尺度を用いた。第1尺度は心の支えとして宗教を肯定する尺度、第2尺度は宗教の弊害を指摘する尺度、第3尺度は神仏の存在や加護を信じる尺度、第4尺度は宗教を人間の弱さの現れと捉える尺度、第5尺度は宗教を人との和や愛情と捉える尺度、最後に第6尺度は超自然的存在を認める尺度である。

日本の看護学生の場合、韓国の学生より心の支えとして宗教を肯定しない傾向や、宗教を人との和や愛情と捉えない傾向が見られた。これらの傾向は、科学が発展した物質文明社会である日本の社会に恵まれてきた日本の大学生は、宗教の必要性をあまり感じなくなってきたことから考えられよう(高木・張,1989)。また日本は韓国より宗教の弊害を指摘する傾向はあるが、宗教を人間の弱さの現れと捉える傾向が少なかった。日本において宗教の弊害を指摘する傾向が見られたのは、最近の宗教絡みの事件に影響を受けたものではないかと考えられる。

Table 1. 日韓の宗教観尺度の得点

宗教観尺度		日本 (n=103)	韓国 (n=94)	日韓差 F値
第1尺度 心の支えとして宗教を肯定する尺度	M (SD)	2.52 (.54)	2.86 (.60)	18.23***
第2尺度 宗教の弊害を指摘する尺度	M (SD)	2.79 (.45)	2.40 (.59)	28.31***
第3尺度 神仏の存在や加護を信じる尺度	M (SD)	2.22 (.45)	2.71 (.65)	29.44***
第4尺度 宗教を人間の弱さの現れと捉える尺度	M (SD)	2.41 (.56)	2.72 (.53)	15.74***
第5尺度 宗教を人との和や愛情と捉える尺度	M (SD)	2.46 (.53)	2.85 (.56)	25.70***
第6尺度 超自然的存在を認める尺度	M (SD)	2.84 (.72)	3.04 (.66)	4.12***

*p<.05 ***p<.001

日本の看護学生は神仏の存在や加護を信じない傾向がある反面、超自然的存在を認める傾向があった。このような傾向は、「現代の若者を惹きつけているのは、既存の宗教団体ではなく、「小さな神々」だといわれている」(NHK世論調査部,1991)ということから理解

できるのではないだろうか。日本の看護学生の宗教を否定的に捉える傾向は、高木ら（1989）の「大学生の宗教態度と宗教観尺度に関する日中比較研究」においても現れている。新しい世代において、宗教や信仰は現世利益的なものとして、若い人々のレジャーとしての側面を持っていると考えられる（NHK世論調査部,1991）。

韓国の場合、日本の看護学生より、宗教を心の支えとして肯定する傾向、神仏の存在や加護を信じる傾向、宗教を人との和や愛情と捉える傾向、超自然的存在を認める傾向が見られた。これらから韓国の看護学生が日本より、宗教を肯定的に受け入れていると考えられる。しかし、宗教を人間の弱さの現れと捉える傾向が見られた。この傾向は韓国の若者の、特に若い男性の布教活動への反応から理解できる。彼らはよく、宗教を信じるのは自分が弱いからであって、自分自身は弱くないし、自分たちを信じるから宗教は要らないという。韓国の看護学生において宗教の弊害を指摘する傾向が少なかったのは、宗教を肯定する傾向があったためであると考えられる（Table 1.）。

2. 死の不安尺度における日韓比較

1) 死の不安尺度

本調査で死の不安を測る尺度として用いられたのは死の不安尺度（DAS）（Templer,1970）で、15項目の質問で構成されている。この尺度の日本の看護学生の平均得点は8.68（SD=3.16）、韓国は9.68（SD=2.74）で、日本の方が韓国より死の不安が少ないことがわかった。

死の不安尺度（DAS）の作成者であるTemplerは1971年版『心理学年報』の論文の中に死の不安尺度テストのデータを発表している。被験者は0点から15点までの範囲で、大体4.5から7.0の得点内に多く見られ、平均偏差値は3.0前後であったという（White,1988）。女性は終始一貫して男性より尺度の得点が高く、精神病者は正常者に比べて高得点をあげているという（White,1988）。この結果からすると、日韓の看護学生ともに平均得点は高いが、その範囲の中にはいることが最も健全な精神状態を意味するものではない（White,1988）。

2) 日本人における死の不安

日本人はどのような死の不安を持っているのだろうか。加藤は日本の近代を代表すると思われる人物の死生観を研究して、集団性の強い日本の近代社会では、死の恐怖が少なく感じられるとしても不思議ではないと指摘している。日本、または日本人が持っている集団性の強さが死の恐怖を少なく感じさせるのであれば、本調査において日本の方が韓国より死の不安尺度で得点が低かったことが理解できるのではないだろうか。

3) 韓国人における死の不安

韓国の方が日本より、死の不安尺度の得点や、また宗教・宗教活動別に調べた死の不安尺度において得点が高かったのはなぜだろうか。韓国では、死の不安に関する研究はまだ盛んに行われてはいないため、それを裏付けるものはあまりない。韓国人が持っている死の不安についてみる前に、韓国人が持っている情緒についてみていく。韓国は、昔から政治の混乱を多く経験してきた。韓国人は様々な混乱を生き抜き、今日に至った。韓国人の

情緒は、よく「恨」という文字で表される。この文字は日本の漢字が持つ意味とは少し違うイメージを持つ。これは韓国語の発音で「ハン」という。この「ハン」というのは、対象化されない対象というべきものに対する「恨」であり、普通の恨みとは違う。認識されないものであるといわれる。韓国人のものの考え方の底には未だにその情緒が残っているのではないかと思われる。

韓国人の葬式をみると、韓国人の「恨」をみることができる。彼らは家族の一人が死ぬと、死んだ日から葬式の日まで声を出して泣き続ける。親が死んだ時、声を出さずに泣くのは親孝行に反する。葬式の時、夫に死なれた妻のすごい泣きぶりをみることができる。彼女は地をたたき、自分の胸をたたきながら泣き続ける。まさに彼女の胸には「恨」、「ハン」が募っているのである。彼女が持っている恨みは、自分を一人置きにして死んでしまった夫に対することであり、また夫を襲った死に対することであり、夫が生きていたときにもっとよくしてあげたらという悔やみでもありうる。しかし、その彼女の心の底にある「恨」はそれらよりも、自分の人生や運命に対するものであるといえよう。彼女の中にはもはや恨みや悔やみは存在しない。彼女の恨みは自分の人生や運命をあきらめて受け入れるしかないことに対する「ハン」である。

韓国人はよく一生の運とか定めとかという言葉を使う。彼らは何か自分の力でどうにもならないことが生じたとき、これは一生の運だ、定めだといいいながらあきらめる。そして、そのあきらめは解決されず、心の中で「恨」として残る。この韓国人の「恨」の意識は、死の不安とも関連するのではないだろうか。韓国人はそのような意識で、絶えず死を避け、生に執着するといえるのではないか。自分の運命だと、あきらめて受け入れるとはいえ、それは生をあきらめるのではなく、むしろ生き続けるためのあきらめであると考えられる。韓国人は限りなく生に執着し、生を維持するため、自分の健康のためなら何でもし、何でも食べ、死を避けようとすると考えられる。このような生に対する強い執着心が死に対する不安を持たせるのではないだろうか。

上記のような韓国人の情緒以外で、本調査の対象者となった韓国の看護学生の方が日本の看護学生より死の不安が高かった理由として、韓国の政治や社会の不安定さが考えられる。むろん、今や韓国の社会や政治は安定してきてはいるのだが、日本の社会に比べると未だ不安定である。韓国は国が小さいせいもあるためか、何か大きな事件が起こると、国全体が揺れるようである。韓国人には潜在的に、死の不安を含んだ不安感があるのではないだろうか。

4) 死の不安と宗教との関連性

宗教と死の不安との関連性に対するいくつかの研究がある。McDoald (1976) は、死に対する不安は宗教にどの程度切実に献身しているかと深く関連していると指摘した。FlorianとKravitz (1981) は、宗教を信じる程度による死の不安を調べた結果、有意性があると分析した(徐,1987)。Fiefel (1950) は死に対する反応には様々な要素が関わっているといい、その要素の中で宗教的態度をあげている(Choi,1990)。Wittkowskiらの研究によると、倫理に対する態度や教養の知識、教会へ出向く頻度などにより、信仰の強さが低い死の不安と最も関係が深いと考えられる(Templerら,1990)。

しかし、本調査ではそのような宗教・宗教活動及び宗教観との相関はみられなかった。

但し、キリスト教を信じる群においては、日本の看護学生の方が韓国の学生より得点が低く、死の不安が少ないといえる。日本と韓国の死の不安について前述してあるが、キリスト教において死の不安は、少し違う側面を持っているのではないだろうか。キリスト教は、信じる者には永遠の生命を約束する。キリスト教では死んでも、それは肉体の死であって永遠の死は存在しない。従って、キリスト教信者が死の不安が少ないということはむしろ当然のことであろう。このような考え方からみると、韓国のキリスト教信者において死の不安が大きいということは果たしてなぜだろう。韓国ではキリスト教を信じる人は日本より断然多いが、その人達の信仰心はいかなるものであろうか。韓国のキリスト教を信じる群において、最も多かった宗教活動は「宗教団体に所属しているが、あまり活動しない」であった。彼らは自分の宗教に関して信念をなくしているのではないだろうか。だからこそ、彼らは永遠の生命を得られるだろうかと疑い、死に対して不安を持つのかもしれない。そして、自分たちの不真面目な信仰心では、永遠の生命を得られないまたは神様の世界には入れないという不安を持っているかもしれない。

日本のキリスト教を信じる群においては、キリスト教のみならずすべての宗教に対する日本の若者の現世主義的思考から死の問題にそれほど宗教を関連させない、とも考えられるのではないだろうか。

宗教が死の不安と関連を持たないということは次のことから説明できるであろう。デューイによると、伝説的な宗教はもはやその役割を終えてしまっていて、神は死んだけれども、人間の生き方としての「宗教的なもの (the religious)」は、むしろ現代においてこそ、その重要性を増しているという (脇本,1993)。宗教が死の問題よりも、現在の生き方により関わるということであると理解できる。

5) 死の不安尺度と他の変数

ここでは死の不安尺度と相関が見られた質問項目に対して検討する。

〈死に直面する心の準備と死の不安〉

日韓ともに、「自分自身の死に直面する心の準備ができていますか」との質問項目と有意な相関が見られ、自分の死に直面する心の準備ができていたと思うほど、死の不安が少なかった (Table 2.)。

自分の死に直面する心の準備というのはどういうことなのだろうか。1961年アフリカで飛行機事故で死んだ、国連の元事務総長ダグ・ハマースホルドは、遺体が発見されたとき、その悲惨な体の状態とな別に、手に一束の草を握っていてその表情はきわめて平和に満ちていたという。彼は、生前に次のような記述を残している。「人がどのように自分で運命を定め、身体が死を定めるかによって、選択は必ず影響を受けてゆくものだ。結局のところ、死をどのように考えるかにより、人生の課するすべての問題への答え方が決まってくる。…したがって、死への準備が必要になる」 (White,1988)。彼は死への準備ができたといえよう。

Table. 2 自分の死に直面する心の準備の項目と死の不安尺度

	死の不安尺度		日韓間 有意差
	日本 M (SD)	韓国 M (SD)	
全くそう思わない	10.28 (2.89)	10.63 (2.34)	
あまりそう思わない	9.49 (2.64)	9.33 (2.56)	
少しそう思う	6.33 (2.81)	8.70 (3.01)	**
非常にそう思う	7.00 (2.65)	7.00 (2.71)	
回答間有意差	***	*	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

医者であるシャーマン・ハーシュフィールド博士は次のように述べている。「死について自分の感情と向かい合ったり、患者にその手助けをするために、学ぶべきことがたくさんあるが、まず第1に自分たちのもつ根深い恐れを認められるようになることだ」(White, 1988)。本調査の対象は看護学生であり、彼女たちは例外もあるだろうが、いずれ看護婦になる。未来の看護婦である看護学生が自分の死に直面する心の準備ができているのであれば、自分の持つ死への恐れを認め、その間情に向かい合い知ることができるであろう。

〈死生観と死の不安〉

しっかりと死生観を持っているかという質問と死の不安尺度に相関が見られ、日韓ともに死生観を持っているほど死の不安が少ないと考えられる (Table 3.)。しっかりと死生観というのは、言い換えれば、しっかりと死に対する価値観、生に対する価値観であるといえよう。自分はどのように生き、どのように死ぬかを考えているということではなかろうか。

また、この質問項目においても、日本の方が韓国より死の不安が少なかった。日本では、韓国より死や死生観に関する関心が高まってきており、それらに関する文献も多いが、韓国ではそうではない。韓国では死生観という言葉もまだ馴染んでいない。このことは日本の方がしっかりと死生観を持ち、死の不安が少ないという結果の要因のひとつであると考察できるだろう。

Table. 3 死生観と死の不安尺度

	死の不安尺度		日韓間 有意差
	日本 M (SD)	韓国 M (SD)	
全くそう思わない	10.21 (2.78)	13.25 (1.71)	
あまりそう思わない	9.49 (2.76)	10.32 (2.44)	
少しそう思う	7.23 (3.23)	8.90 (2.57)	*
非常にそう思う	5.00 (1.22)	8.63 (3.46)	*
回答別有意差	***	**	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

〈死体に対する考え方と死の不安〉

死体を見ることをどう思うかという質問と死の不安尺度に相関が見られ、死体を自然に見られる人ほど、死の不安が少なかった (Table 4.)。日本の看護学生において、最も多かった回答は「何となく落ちつかない」であった。これは日本人が持つ特別な遺体観から現れたことだと考えられる。遺体と死体はその意味合いが違い、「死体」は死んだ状態の体を表す一般的な表現であるのに対し、「遺体」はアイデンティティが確立されている (柏木, 1995)。日本の看護学米においては、遺体が単なる死んだからだけではなく、アイデンティティを持つと考えているため、何となく落ちつかないと、最も多く回答したのではなからうか。死んだ体にも何かがあると思っているため、落ちつかないと考えられる。

Table. 4 死体を見ることと死の不安尺度

	死の不安尺度		日 韓 間 有 意 差
	日 本 M (SD)	韓 国 M (SD)	
こわい	11.40 (2.84)	11.30 (2.76)	
何となく落ちつかない	9.55 (2.99)	10.59 (2.03)	
自然に見られる	7.25 (2.94)	7.86 (1.98)	
その他	7.84 (2.85)	9.27 (2.52)	
回答別有意差	***	***	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

IV. 総合論議

1. 死の不安と宗教との関連性

本調査では、宗教を持っているか否か、どのような宗教を持っているか、いかなる宗教活動をしているか、宗教に対しどのような考え方を持っているかなどと、死の不安との関連性はみられなかった。信仰に対する考え方も死の不安には影響を与えず、宗教が日常生活に影響を与えているかいないかも死の不安とは関係がなかった。宗教と関連する質問項目のほとんどにおいて、死の不安との相関が見られなかった。

宗教が死の不安との関連を持たないということは、宗教の役割の変化を持って説明することができよう。それは、現代の宗教が死や死後に対することより、現世の人間の生き方としてその役割を持ち、また、現代の人々も宗教から現世利益的なものを追求するからではなからうか。

2. 死の不安と関連する要素

死の不安との相関が見られたのは次の項目である。自分の死に直面する心の準備ができていると思うかどうか、しっかりと死生観を持っているかどうか、死体を見ることをどう思うかという項目である。自分の死に直面する心の準備ができていると思う人ほど、しっかりと死生観を持っているほど、死体を自然に見られる人ほど死の不安が少なかった。

3. 日韓における死の不安

本調査の対象であった日本と韓国の看護学生においては、日本の方が韓国より死の不安が少なかった。宗教を始め、他の質問項目の回答別に死の不安を調べたところ、その傾向はほとんどの項目において現れた。死の不安に関する研究の中で、心配事や不安などに過剰に反応する人ほど死の不安が高いという事が見られた (Frazierら,1988)。このような感情的反応を死の不安と一緒に調べることが死の不安が高かった要因を知る一助けとなるだろう。しかし、本研究でははっきりとした要因を見出すことはできなかった。

死刑囚の執行に直面した心境に対する報告によると、彼らは死の恐怖を統制することができたという。その理由は、動じない信念によるものだといっている (Choi,1990)。これはまさに、しっかりと死生観を持っていたからだといえるのではないだろうか。死の不安の恐怖がなかったのではなく、それらを信念やしっかりと死生観によって統制したのである。

Ellis は、死の恐怖は本能ではなく、経験から得たものだといっている (Choi,1990)。経験から得たものというのは、また違う経験や学習によってなくすことができよう。しかし、死の不安をなくすことが最善とはいえないだろう。それよりも、死とは何か、なぜ死に対し不安や恐怖を感じるかを理解することが大事であろう。人のライフイベントの中で、結婚や就職、出産などは経験するとは限らないが、死は誰もが経験することである。しかし、結婚などに関しては、日頃から考える人が多い。結婚には適齢期があって、その歳に近づく多くの人があわてて準備をしたりする。しかし、死には適齢期などないし、いつ訪れるかは誰も知らないので、日頃より準備するべきであるにも関わらず、準備する人はほとんどいないだろう。柏木は自分の誕生日に死を考えることを提唱している。もしその言葉に従えば、1年に1回は考えられるだろう。

本調査の対象は看護学生であるが、未来の看護婦になるであろう看護学生が、死について理解し、自分の持っている死の不安に気づき、その内容を理解するということは、死を迎える患者の死に方や死に対する不安などをよりよく理解できることになるのではないか。また死を迎える患者だけではなく、一般の患者や一般人が持っている死に対する考え方や死の不安について理解することは、よりよいケアを人々に与えるために重要なことであると考えられる。死に対する不安を否定するのではなく、それを受け入れ、理解することは、患者への理解へとつながると考えられる。

【引用・参考文献】

柏木哲夫 1995 死を学ぶ 有斐閣

Lee, Eunbong 1993 宗教世界の招待 Jihak publishing

Kubler-ross, E. 1991 On life after death. Choi, Junsik (訳) 1996 死後生 Dae Hwa Press

white, John 1988 A practical Guide to Death and Dying. 2nd edition. 石井朝子 (訳) 1990 死と友になる 春秋社

Choi, Younghee 1990 死と臨終に対する心理的側面 梨花女子 大学看護学研究所 (編) 臨終と看護 寿文社 Pp.31-41

- 松岡寿夫 1992 デス・エデュケーション 医学書院
- デーケン,アルフォンス 1986 死への恐怖 デーケン,アルフォンス・メヂカルフレンド
編集部(編) 死の準備教育第3巻 死を考える メヂカルフレンド社 Pp.194-206
- 脇本平也 1993 死の比較宗教学 岩波講座宗教と科学7 死の科学と宗教 岩波書店
Pp.271-298
- 平山正実 1991 死生学とはなにか 日本評論社
- 霜山徳爾 1984 死に臨む者とその家族 曾野綾子・A.デーケン(編) 生と死を考える
春秋社 Pp.3-34
- Templer, D., Cappelletty, G., Kauffman, I., & Franks, K 1990 Exploration of
death anxiety as a function of religious variables in gay men with and without
AIDS. Omega, 22(1), 43-49.
- 高木秀明・張日昇 1989 大学生の宗教態度と宗教観に関する日中比較研究 横浜国立大
学教育紀要, 29, 121-135.
- 高木秀明・吉田富二雄・森美奈子 1987 現代大学生の宗教意識(1), (2) 日本心理学会
第51回大会発表論文集, 544-545.
- NHK世論調査部 1991 現代日本人の意識構造 日本放送出版協会 Pp.87-97.
- 徐恵京 1988 韓米老人の死に対する態度研究 韓国老年学誌, 7, 39-50. Pp.39-50.
- 堀洋道・山本真理子・松井豊 1994 心理尺度ファイル 垣内出版 Pp.422-426.
- Templer, D. 1970 The construction and validation of a death anxiety scale. The
Journal of General Psychology, 82, 165-177.
- 今田恵 1955 宗教意識の発達 牛島義友(編) 青年心理学 講座I 文化と人生 金子
書房 Pp.101,104.
- 後藤洋文 1981 オカルトの意味するもの ジュリスト総合特 集現代人と宗教 有斐閣
Pp.117-122.
- 金児暁嗣 1987 日本人の宗教行動と宗教意識 三隅二不二(監) 現代社会心理学 有斐
閣 Pp.398-416.
- 託摩武俊 1986 青年の宗教意識を探る研究フォーラム 朝日新聞 1986年10月25日付夕
刊
- Templer, D., Lester, D. 1993 Death anxiety scale:A Dialogue. Omega, 26(4), 239-
253.
- Frazier, P. H., Foss-Goodman, D. 1988 Death anxiety and personality:Are they
truly related? Omega, 19(3), 265-274.